

講評文

12月24日 5番目

高田高校

「ダンダン男バスバスガス爆発ガール」

この劇は、演劇部のミクと元バスケットボール部マネージャーのエマを中心に、演劇部員やバスケ部員など男女9人の登場人物によって、人間関係の複雑さを描いた作品でした。高校生にも共感しやすい人間関係の衝突や葛藤が、リアルに表現されていました。

人は誰も良い面とそうでない面の両方を持っており、それが集団の中で表に出ることで、ぶつかり合いが生まれてしまう様子が描かれていました。特に、悪いことを悪いと指摘したことから対立が起こる展開からは、本心を抑えながら周囲と関係を保とうとする人間関係の難しさが伝わってきました。一方で、悪いことを悪いと指摘せず、誰に対しても良い顔をしてきたミクからは、最終的に周囲から人が離れてしまうという展開が、人間関係に明確な答えが存在しないことをより強く突きつけてきました。ガスマスクをつける演出は、登場人物たちが素の自分を隠し、周囲に合わせて振る舞っている姿を象徴しているのではないかという意見も出ており、様々な解釈が可能な作品でした。

舞台美術や小道具の工夫も効果的でした。スリッパの色を学年ごとに分けることで人物関係が分かりやすくなっており、観客への配慮が感じられました。また、ダンボールで舞台装置を構成し、それを最後に崩すという演出は、人間関係や感情が限界を迎えて崩れていく様子を視覚的に強く表現していました。そこに、スモークやホリゾントの橙色の照明が重なったことで、感情の噴出としての「爆発」がより伝わってきて、舞台に引き込まれました。一方で、感情が高ぶる場面では怒鳴る表現が多く、やや単調に感じられる部分もありました。声の大きさだけでなく、間の取り方や抑えた言い方、沈黙など、さまざまな伝え方が加わることで、登場人物の心情がより表現できたのではないかと思います。そうした表現の幅が広がれば、作品全体の説得力もさらに高まると感じました。終盤でホリゾントが一瞬赤く染まる演出は、人間関係や感情の爆発を象徴しているのではないかという意見が出ました。また、マンダレーの夕日を連想させられたという意見もあり、そのような照明表現は、観客に解釈の余地を与え、作品の余韻を深めていました。

この劇は、人と人との関わりの中で生まれる対立やすれ違いを通して、人間関係の醜さや難しさを率直に描いた作品でした。私自身、見終わったあとも考えさせられる部分が多く、強く印象に残りました。高田高等学校のみなさん、上演お疲れ様でした。